

明治元年戊辰初秋

天地変異



幡馬次郎 著



417 6956

天地変異序

孔子ハ怪力亂神をうろくし以て教を垂し後世
 の大人君子ハ怪力亂神をうろくし以て教を垂し
 ても留めざる今この冊子に天地変異と題
 し人の想像を興ふるをうろくとし編せざる
 件を原より取集め翻譯して世に公するハ
 少クも奇を著し幻成ひるを著し人ハ何
 ら驚き大驚しと余嘗て本心ハ奇を折る幻
 を推して天地変異ハ地異ハ異奇とす

天地変異

序

一

蓋て或る解を以てゆふに必ず此を以て
又此界の如く顯れおきりたるは詞未
く過河よりゆへに此一書を略し
抑も母より所のて受地を以その理あり
まて固よりふ必候とすまは是れその見懼れ
中ありて其受とハれをさるなり
おろけき何り怖るは火の燃え水の沸
き日射り昇るを没するの足候れを
怖れおるきおれまはとも遇候に斯る事

何ハ何とあるを評し居きは乃ち新々
あるは何れ理を又新々あるとふ美事
と信せられたるは考へれば深きも過
る世のおもひするがゆへに怖るはきを
信せ候るは深きとてその道理を
す解しハ雷を火の怒神の所お候
るのそは成るは星を兵の死と云
神意の如くと云ふは此類は
の理あるは是れを始れ虹電流星
九日同時昇

三月廿五日無りしより陰暦松火抄
一二月廿五日無りしより陰暦松火抄
を掲げ人をししてまわくは亦乃理を合点せ
しめむらなくはきもの怖る貴ものを心解
おん一してせりお福お合点まきと森りるを
祢ふのこ

交應の戊辰年八月

交應善執自社後

凡例

一此書元來婦人小児の惑を解た事物の道理と
究めしむるを主意とせれば勉て浅く翻訳し
我邦の國解を挿み以て人の讀む易く解し易
とかなんらんと希つども敢て私意を加へ原
書の趣意と曲げざれば讀む人その淺陋と厭
ふなりれ
一原書の如きはその数一あふざれば一々爰に
書載せば皆彼千八百六十五年より七年迄の

書中より抄譯をりのなり

一此書中幾里と云ふものハ英國の一里にて我
十四丁四十二間二寸八分ニ當る今此を我里
法ニ改るときハ竒數を生し却て讀む人ハ不
便ふらんはと云ふ所ハ恐れ暫らく彼里法ハ従ふ

天變地異

目錄

雷避の柱の事

地震の事

彗星の事

虹霓の事

九日同時ふ出たる事

三月並び照る事

流星並ふ火の玉の事

陰火の事

目錄終

天變地異

晴侯氏日記

小幡篤次郎 纂輯

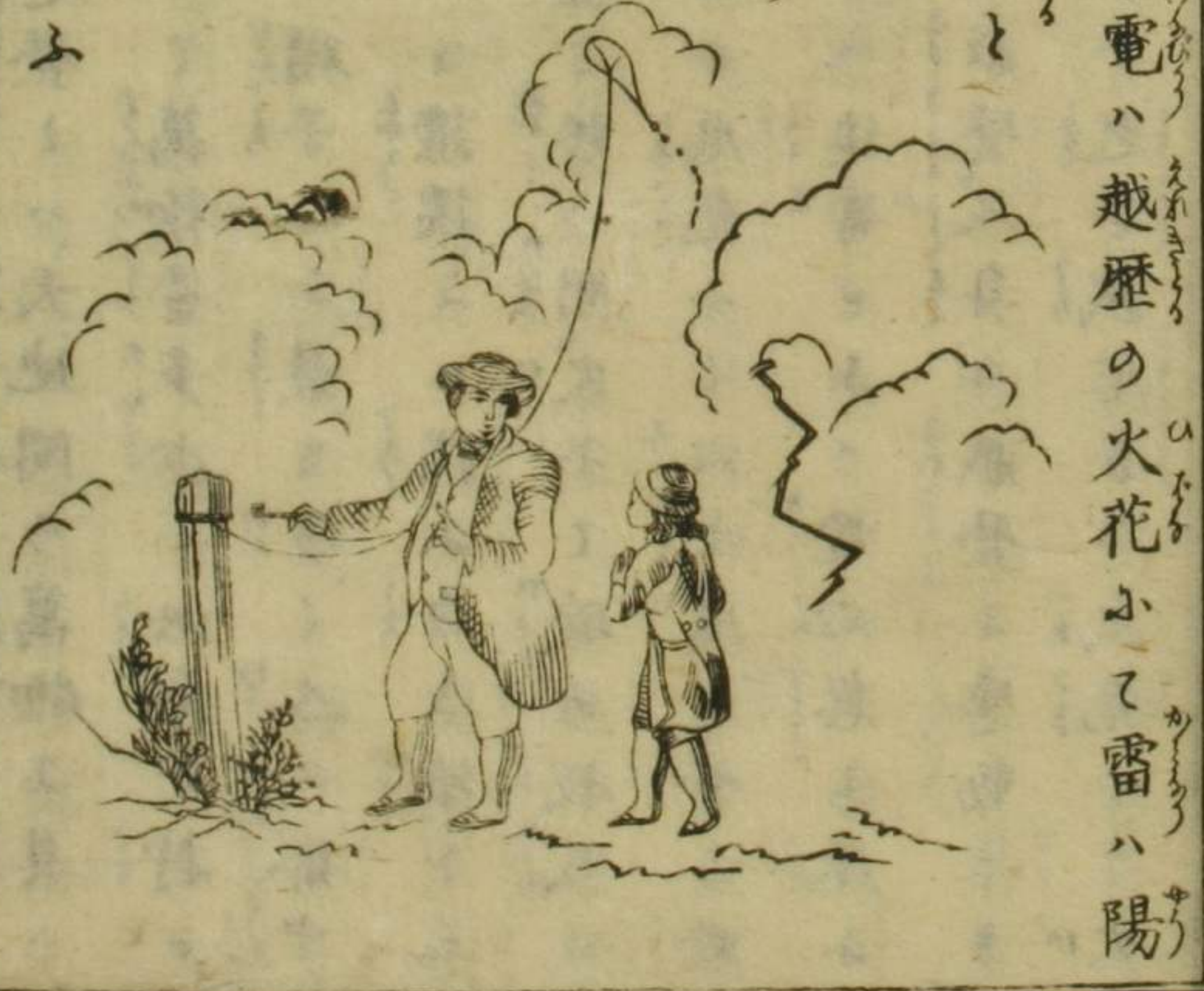
雷避の柱の事

大古の識者ふき時代ハ雷と惡しき神の叫び
 と唱へ人々恐を怖さしものありがふらんきを
 人と云ふ人世不出て後ハ斯る惑を説くものも
 なく此災を避る道具も出来し人の幸ひ限りふ
 しふらんきを人ハ亞米利加合衆國の人おて世

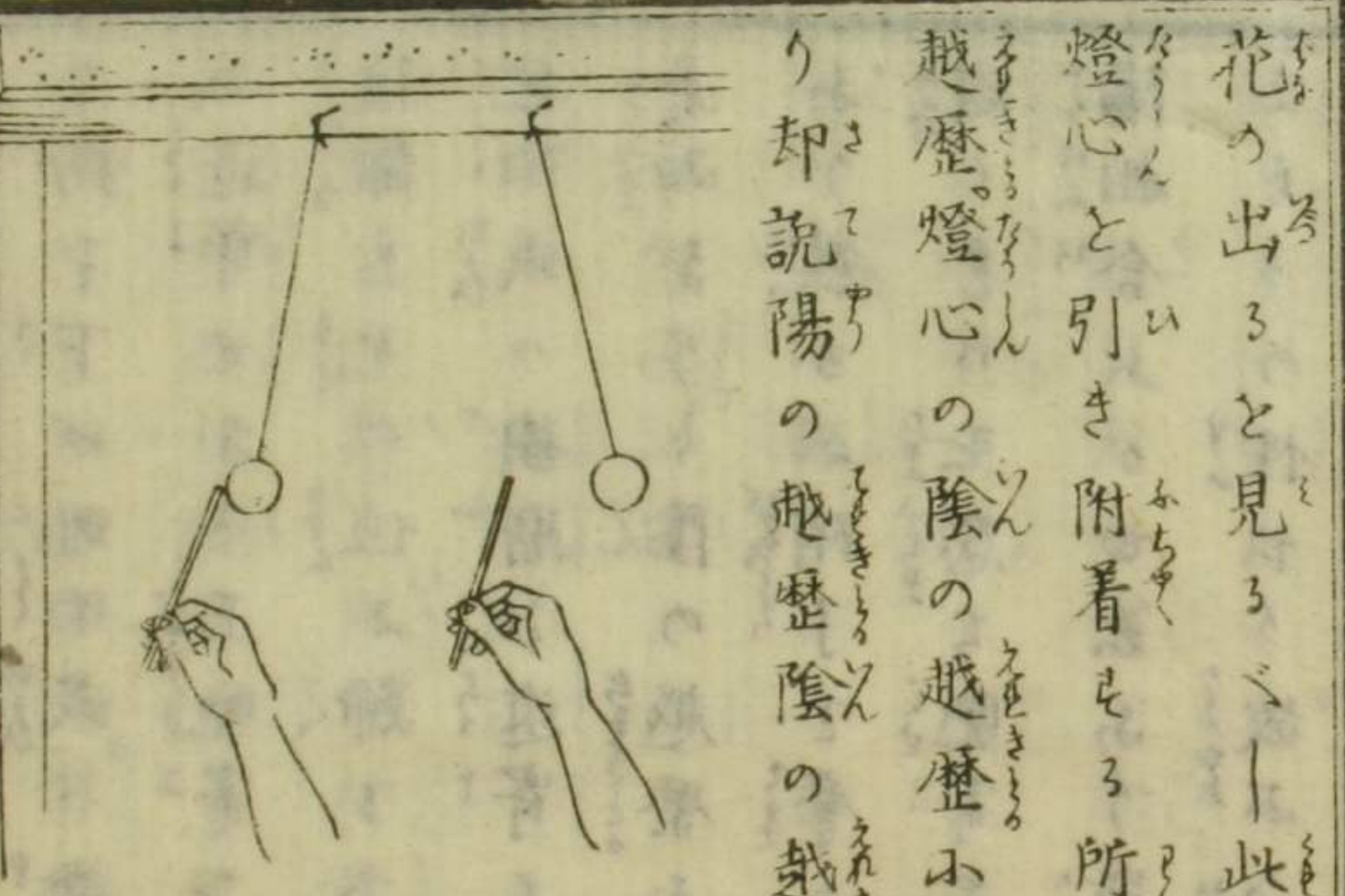


小名高き英雄ふる少年少の時より諸學志を
 潜め殊小越歴の學問小秀て奥義を極めより
 電も雷も皆越歴の所作ふらんと思付き託度工
 夫と廻ら一彼千七百五十二年我延享元年六月
 小至り雷雨の起ると待ら紙鳶と空中小放ちた
 る小雲間の越歴糸を傳り種々の試験小上ヤ
 ける小聊も尋常の越歴小異ふることやきを發
 明せり歐羅巴の學者も之と聞傳へ又同トく試
 験しとる小全くふらんきまんの説は相違ふき

一の世の説一変一電ハ越歴の火花小て雷ハ陽
 の越歴と陰の越歴と
 合もんととるるとき
 脉一の間小二十八
 萬里の遠路と馳
 ともゆ空の氣
 還小其行跡の空
 所と塞がんととる
 より響と發とと云ふ



小極こごくより元来越もとこえ歴れきとハ天地間てんちかんの萬物ばんぶつニ具もハ
 了したる一いつ種しゆの氣きふて萬物ばんぶつ皆みな多少たうしやう小こ此氣ここのきを持もて
 ざらハハ一いつ琥珀こくわくと硝子びんごと小こ最もも多おほく人ひとの躰中かたみち
 小こ此氣ここのき具もたりたる證まじり據こハ試し小こ白しろき紙かみを三
 重お重ちゆう或あるハ四重よんじゆう小こ疊たかと暫しばらくの間まひ火ひふて暖あたため板いた或あるハ
 疊たかの上うへ小こ置おき手て早はやく爪つめ先さきふて六む七しち度ども摩こり燈とう
 心こころの如ごとき輕かろきものへ近ちか寄よせおハ燈心とうしん忽たちち紙かみ小
 附つく着くべ一いつ全ぜんく紙かみの越こ歴れき人身じんしんの越こ歴れき小こ感かん動どうさき
 たるゆゑあり暗夜あんや小こ之こを試しとるハ爪つめ先さきより火ひ



花はなの出いると見みるニ一いつ此こ即すなはち越こ歴れきの火ひ花はなあり其その
 燈心とうしんと引ひき附か着ちやくする所ところ以もつハ紙かみ小こ起おこりたる陽やうの
 越こ歴れき燈心とうしんの陰かげの越こ歴れき小こ合あはんとするがゆゑお
 り却さ詭ぎ陽やうの越こ歴れき陰かげの越こ歴れきとハ琥珀こくわく小こ起おこりたる
 越こ歴れきと陰かげと一いつ硝子びんご小こ起おこ
 したる越こ歴れきと陽やうとを之こ
 と試しむる法はうハ圖ずの如ごとく
 山吹やまぶきの樹心じゆしん小こて小こき玉たま
 と造つくり絹糸きぬいとを鴨居かひよ

り釣て下げ琥珀或ハ樹脂と摩り越歴と起し之
小近寄せふハ玉馳寄りて之と附着き暫りて
復離せ元の位小歸るべし既小離せて後ハ再び
琥珀或ハ樹脂と近寄るとも避けて附着るを
是雨ふぐり陰の越歴ふせハ相嫌ひて引りさる
あり然る小硝子を摩り越歴と起したるものと
近く見ハ玉忽ち馳寄りて之と附着くべし是陰
陽相合ふが由あり斯く越歴ハ陰陽相合せん
と見るの性なり故小合ハハ靜よりて顕それ

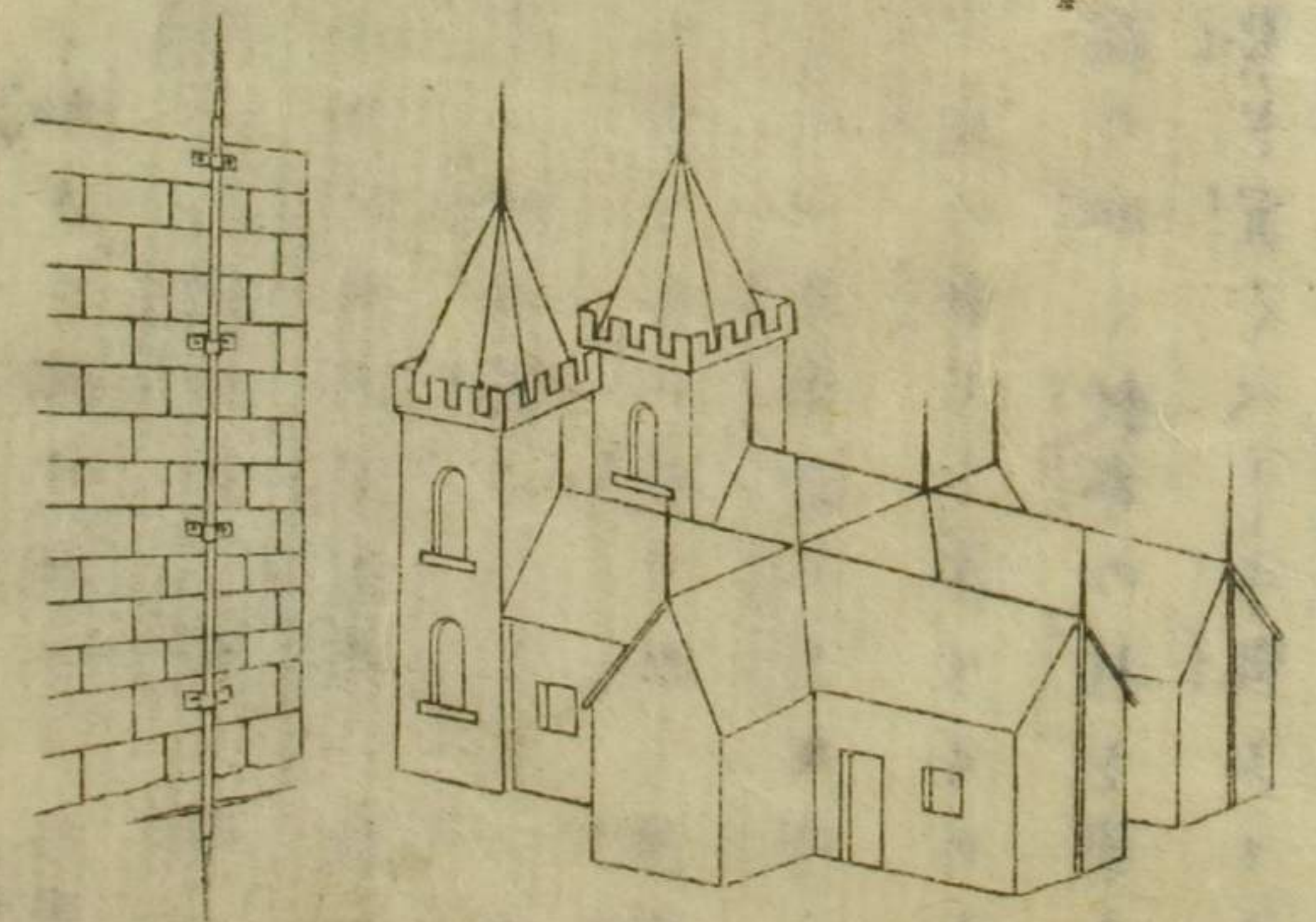
離るをバ動ひて合せんとも此理合し陽の越
歴と起したる雲と陰の越歴と起したる雲との
間小越歴の移り通ふことなり或ハ陰の雲より
陽の雲小移ることなり或ハ下小移るべき雲ふ
くして直小地ニ傳ることなり是雷撃の起る
所以小て其速ハ脉一ツの間小二十八萬里を行く
ものあり斯く光ハ神速なる小音ハ唯脉一ツの間
小二百間と馳るりの由光の速ハ算用小ハ
らざるものありて雷の落と落ざると知るの法

ちり先電を見し時より雷と聞きて脈と押へ一
 二と數へ三四とふまば七八百間の鬼より来る
 ものと知るべし故に先を見て同時小音を聞く
 その小なりざれば恐るゝお及をも又越歴ハ物
 小よりて傳より難きと易きとの差別あり金類
 炭水雪生物火焰湯氣の如きもの小ハ傳より
 易く就中銀銅ハ最も傳より易し琥珀樹脂琥珀
 硝子玉絹獸毛羽乾きたる木空の氣採の如きもの
 小ハ傳より難し故に雷雨の時金箔と置きた

柱又ハ金屏風の下総て大なる金物の下小坐
 るべかたを乾きたる木ハ越歴と傳へざるとも
 湿るときハ傳より易くふるぬぬ高木の下小
 雨を避くべからず若しや雷ハ撃きて死ぬ人
 らバ澤山小水を漑ぎ掛け手を胸板の上小加へ
 或ハ押し或ハ緩めて息を吹回し手術と施さば
 蘇生もることありと云ふ右の如く物より越
 歴の傳より易きと傳より難きとありは見てふ
 らんきりんハ工夫を盡し雷避の柱を造り出

けきバ之ッ為人命を助け家藏を守り恩澤世ふ
 及ミること際限あり此柱を造るふハ銅を第一
 と是きども價貴きを以て尋常鉄にて造るもの
 多し前ふハ大なる金物の下小坐るを戒め爰ハ
 ハ雷避のため鉄或ハ銅の柱を造ると云ふ人
 の不審を招くべし元來此柱を建る主意ハ雷と
 避るるめ小ちと雷を引寄せ善き導きりのよ
 り速小地中散し余所の災を救ふためあり先
 建てんと思ふ屋根の上小圖の如く尖りたる金

の柱を建て四尺許り
 も屋根より高く上
 四尺ハ黄金或ハ白金
 小て鍍金をく左か
 くバ錆附きて越歴傳
 り難し尖の所ハ一
 本は造るも巧り或ハ
 二三本小造るも巧り
 柱の太ハ徑り六分位



の重のふ造るべし餘を細きハ溶け流るゝの患
 あり此柱ハ上四尺の所より継目かく壁と壁へ
 繋ぎ留め下ハ地中ハ入り三又ハ今其一枝ハ
 必ぞ水々或ハ湿地の中へ埋め置くべし又一本
 の柱ハてハ遠方より守りとし成り難し屋根
 より高きこと四尺の所のハ其周邊八尺の守り
 と作り五尺の所のハ一丈の守りとあるものな
 り故ハ大厦の上ハ圖の如く數本の柱を建て
 其間を太き針金にて繋ぎ置くべし手輕なるた

め木柱を建て屋根より上の所を金鍍の銅ハ造
 り継目より鉄の鎖を附け遠く水中ハ沈むるも
 のつきども用をふし難し「ねちや國ハ志んと
 よろくの塔として有名の所の所を「往昔より
 數度の雷撃ハ遇ひ頗る破損せしりども此柱を
 建し後ハ災を被ることありしや又普魯士國の
 「くろが」と云ふ所ハ火藥庫ありて彼千七百八十
 二年我天明二年雷ハ撃きたきども此柱の利徳
 不よりて災ハ羅らざるを得たり「おれを志や」の

火藥庫ハ此柱ふさゆ被千七百六十七年我明
和四年雷擊小遇ひ三千餘人の命と亡ひたり又
彼千八百三十年我天保元年英國の人をとり
氏の工夫ふて三千餘艘の船へ此柱と装置しよ
り十一年の後功驗著しけきバ政府より「
人氏へ金三千磅即ち我九千兩の大金を恩賞せ
し」と云ふ

地震の事

地震ハ人の能く知るる凶變ふて其の根源知り

難きものふきども今より二千三百三年前即ち
我孝安天皇五十八年又當り希臘國小をふさご
らさと云ふ大學者たりて地の底小雲を醸し電
と發をより斯る震動ありふ人として説けり其後
彼千六百一年我慶長六年日耳曼國小きるちを
ると云ふ識者出て地震ハ地の底小數多の大ふ
る窪たりて其一小ハ水を充ち又其一小ハ硝石
硫黄杯の如き燃るりのりて互不通ひ水を煖
め湯氣を蒸せり發るものと説けり又彼千六

百八十六年我眞享三年

英國の「もんこふ」人とい

る「小生れ」も「もち」也けり

と又一人ハ同國の人「ぶり

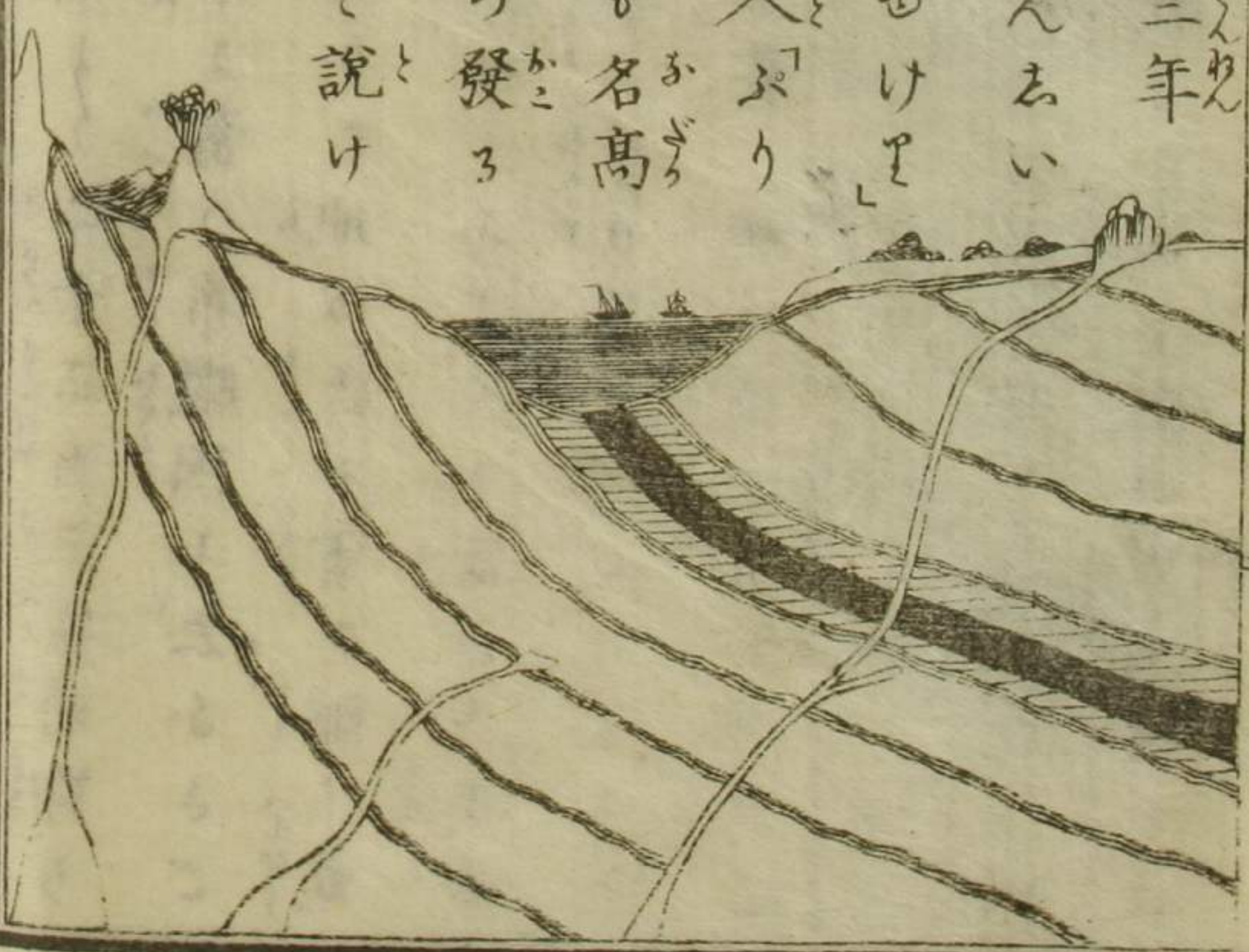
と」り「そて」兩人とも名高

き學者ふるが地震の發る

ハ越歴の所為ありと説け

「斯大古より種々

様々の説ありども



近代の發明ふて地の底ハ一面の火ふり小岩の

上皮を被り其上小土地を載き人の住所とふき

り此上皮小隙ありて水漏れ火の中へ流を入り

し月の蒸さきて湯氣とあり積て出んとされど

も出口なく之が爲震動を發すと云ふ信ふる説

あり地震の災ハ強ち震動の強弱ふりむむその

震法の模様ふり強きも災の輕きりり弱きも

災の甚しきりり即ち其の模様四通りふて左右

不動くりり上下不動くりり抗りり旋るりり

此四の内不て旋を地震ハ強かりざるも恐るる
 きものあり大槩一度の地震ハ脈の六十度打つ
 間と過ることあり折重て震動をることあり
 由名小稀ハ長き震動ハ逢ふことあり地震の
 為田畠埋と家邸破り人畜死亡せしこと數知
 せ或ハ一村の人畜田畠全く地下に陥りしこと
 あり或ハ一國を埋めしことあり島なき所へ嶋
 と湧き海と變つて陸とあり陸を没して海とあり
 一殊更甚しきハ今より二千百五十一年以前我

孝靈天皇八年小當り
 まらやと云ふ所地震へて
 土地人民全く地下に埋
 り又彼七百四十二年我天
 平十四年亞細亞州に地
 震のため村數五百餘り潰
 せ死人の數しきがし
 ぞきの後彼千六百六十二
 年我寛文三年即ち唐土の康熙元年清の聖祖即



年我寛文三年即ち唐土の康熙元年清の聖祖即

位の年唐土小大地震ありて北京許り小も死
の數三十萬人ありと實小開闢以來の大地震
あり又唐土ハ我享保十六年彼雍正九年大地震
ふて北京の死人十萬と越たりと云ふ又彼千
八百五十五年我安政二年小日本國の江都小
大地震ありて都下大概破損せりと此年小土
耳其國のぎろうさと云ふ所も全く毀ち歐羅巴
の中國ふても諸方破損せり斯く地震ハ人小害
ありものふきども我淺間獄の如き烟と噴く山

世界中小三百餘りありて地の心より湯氣を
導き大空小噴出さしむる由名億兆の人民安く
此世小居るを得り火山ハ實小莫太ふる功
りりのあきども唯稀小破烈を起し燃石を投出
し之がよめ田島を埋め人畜を亡ふこと少ふ
らむされども不意小起るもの小ありさきバ避
け難き小ありとを以太利國ふり去りまると云ふ
烟と噴く山あり此山の麓ハ人家も數多あり
て繁昌の場所ありしが彼千八百三十九年我天

保十年の秋小至りせり山俄小鳴り始め又一き
 間止まざり一或る日農家の小供兄弟ふて
 井より水を汲み庭の草木
 乾て枯きんとさると救と
 んと立出て兄ふるまの瓶
 と下せ一水を得ざきバ
 怪て更よこれと試と一
 小尚不初の如一こハ井の
 途中小遮るまのくもふ



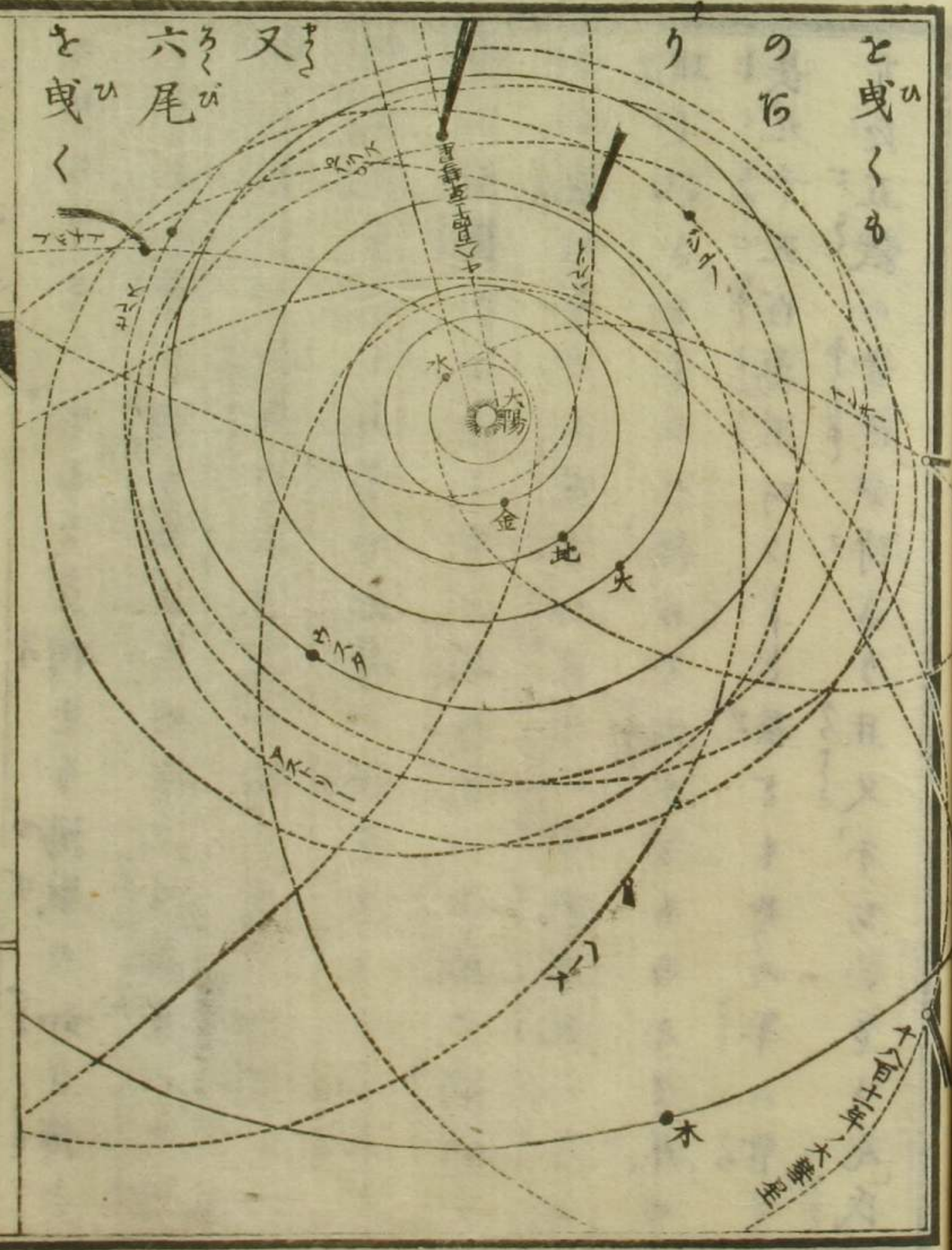
らんと妹ふるりの兄を手傳ひ瓶の底小石を附
 け再度井の中へ下りけり小亦一滴の水を見ざ
 きバ大小驚き家小歸り母へ斯々の事ありと物
 語らんと内小立入り母の居ざると見て跡は殘
 一何る食事杯仕舞ふり黒烟四方小塞がり大
 砲の音とも覺一き響聞へこハ何事やと驚く所
 へ両親の聲外小聞へけきバ馳寄まてこの硫黄
 臭きハ何事やと息止りて既小死んとせりと云
 ひも終らむ父聞ひて先日より山鳴り今日いづ

色の井も水乾き山の破烈迫き小なり急ぎ荷物
 を取片附けよと云ふ俛小早くも妻子と共ふ
 ぶると云ふ城下へ行き弟の家小至り未ど時を
 移さざる小山より火焰を噴き燃石と投出し麓
 の在所皆地下小埋りと斯ることより考ふ
 地震火山の災ハ一國或ハ一村の難儀とハ小
 きども元と天より億兆の人民を救ふ人々之を
 けらきたる月のふきバ心ある人々之を天
 を怨むることありと云ふ

彗星の事

彗星の數ハ六百許りも有りもわふして七十六
 年目小頭もも有り四年目小現ハるも
 り或ハ二千年を経て出るも有り六百の星皆夫
 々の期限有り全く彗星ハ日輪を周り動く星の
 一ッ小て、其の日輪の側小廻り来る時刻ハ自ら
 定り有り猶不燕の春分小来て秋分も去り又來
 春小渡り来るが如く太古ハ此星の出るを見て
 或ハ禍災の前兆とあり或ハ瘟疫の前兆とあり

方ありて恐れしものなり當時ハ世の中大小開
 け千萬里の遠方とも見るべき望遠鏡を造り出
 一之を以て天文を窺ふ由名彗星の尾ハ湯氣の
 如き薄きものにて星の体も殊の外薄きものと
 云ふ其證據ハ星の体を透き通し遠き星の光
 を見るべし尾小至りてハ格別輕きものにて或
 る天文家考の掛目と算を出せしハ二三十日位
 もありべしと云へし彗星のうち体ありて尾
 きものあり或ハ尾ありて体なきものあり一尾



もの有りて一様ありど何きも湯氣の如き薄き
 その小て透き通りたるものなり又彗星ハ光明
 強けきども熱氣ハふきそのありせの證據ハ
 寒暖計を以て其年の温度を測りたる小平年と
 少しも異ふることなり又彗星ハ凶歳の前兆と
 云ふ説けきども彼千八百十一年我文化八年小
 現それとるものハ極めて大なるもの小て尾の
 長九千五百万里ありと虽どもその年ハ曾て
 介五穀の豊熟を得たり且又「不雨ハ」とん氏

の説小大古の世界大洪水ありハ彗星の地小
 近づき水と引たり起り」と云へども此年
 の彗星ハ止しく大洪水の時小現も一星あり
 小之がため洪水も出でされハ其の説信をる小
 足らむ萬一彗星の地小觸りこせりも前
 云へる如く非常小軽きりの由を恐るべき小
 らを況してや天ハ廣大無邊なるもの小てその
 大空と地の如き些少のもの轉び行くも數の極
 りたる彗星の往て又回るも萬々相觸るの恐

かい恰も千万里の大洋小五六枚の木葉を浮む
 るが如し誰う其の相觸るゝと恐るゝその何れ
 ん或天文家若しや衝當ることもしろくんと勘
 定して數ふ比べ説きたるを見せればやの衝當ら
 ざることの慥なるハ二億八千一百万ふしてそ
 の衝當るべき恐るゝハ唯一つありと云へば左
 何れハ彗星の現るゝも恐るゝきもの小何れ
 也

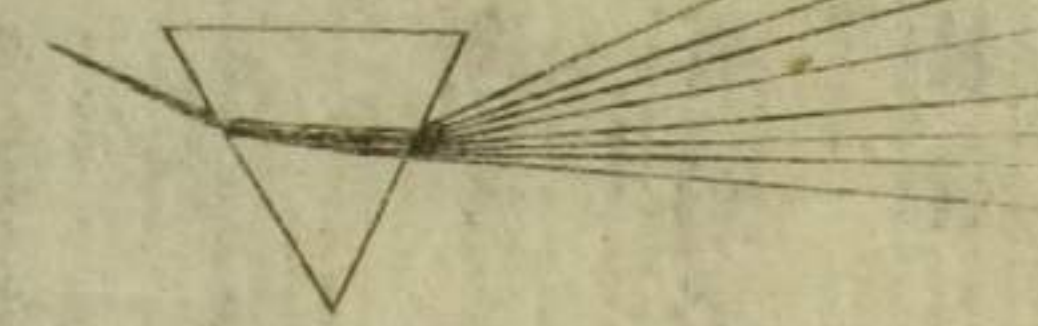
虹霓の事

古昔唐土小てハ虹の騰るゝと陰氣陽氣と冒るゝの
 兆と唱へ女中權臣杯の盛かる小比べたること
 あり是全く物の理を究めざるゝ斯る惑いと
 説きしものあり虹の騰るゝ村雨のとき小限り
 朝小ハ西小騰り夕小ハ東小見
 ると定り自然の理合ゝ
 起るものなり何れ怪む
 き小何れ今此理を説く人
 とその不當て心得置くべき



筒條二ツの第一ハ光の物小當りて折る理合
 第二ハ光の七色小分るの理合なり光の物小
 當りて折る理合ハ誰も知ること小て女中
 の映鏡と持て照し合ハさすハ乃此理小基き
 一ものなり後小もてる鏡より来る光り前の鏡
 小映り夫より折きて我眼小入れバこそ後の姿
 も見さすき道理小是却説此理合より考へまハ
 村雨の水滴と前小もてる鏡と定め此鏡日輪よ
 り来る光と受け我眼小投げ及その理合も合点

ゆくべし次小光の七色小分る理合ハ五六寸



許りの三角形小製しと硝子と
 持て天窓戸と閉したる部屋小入
 り戸小小窓を明け日光の輝と
 容き之と斜小件の硝子へ受けふ
 ハ日輪の光り分きて七色とふる
 べし其の色の次第と下より數へ
 第一と紅色第二と橙紅色第三黄
 色第四と綠色第五と藍色第六と紺色第七と桔

梗色と此七色ハ固まり日光の本色あきども
 碎けて見へさるの斜
 小斯る硝子へ透き通る
 よう光の道筋曲して本来
 の色と頭といたるなり虹の
 彩色も七色ふて此硝子小透き通りたる
 彩色と何も異なることなり右の次第あきバ村
 雨の筈へ難き水滴皆斜小日輪の光と通し夫よ

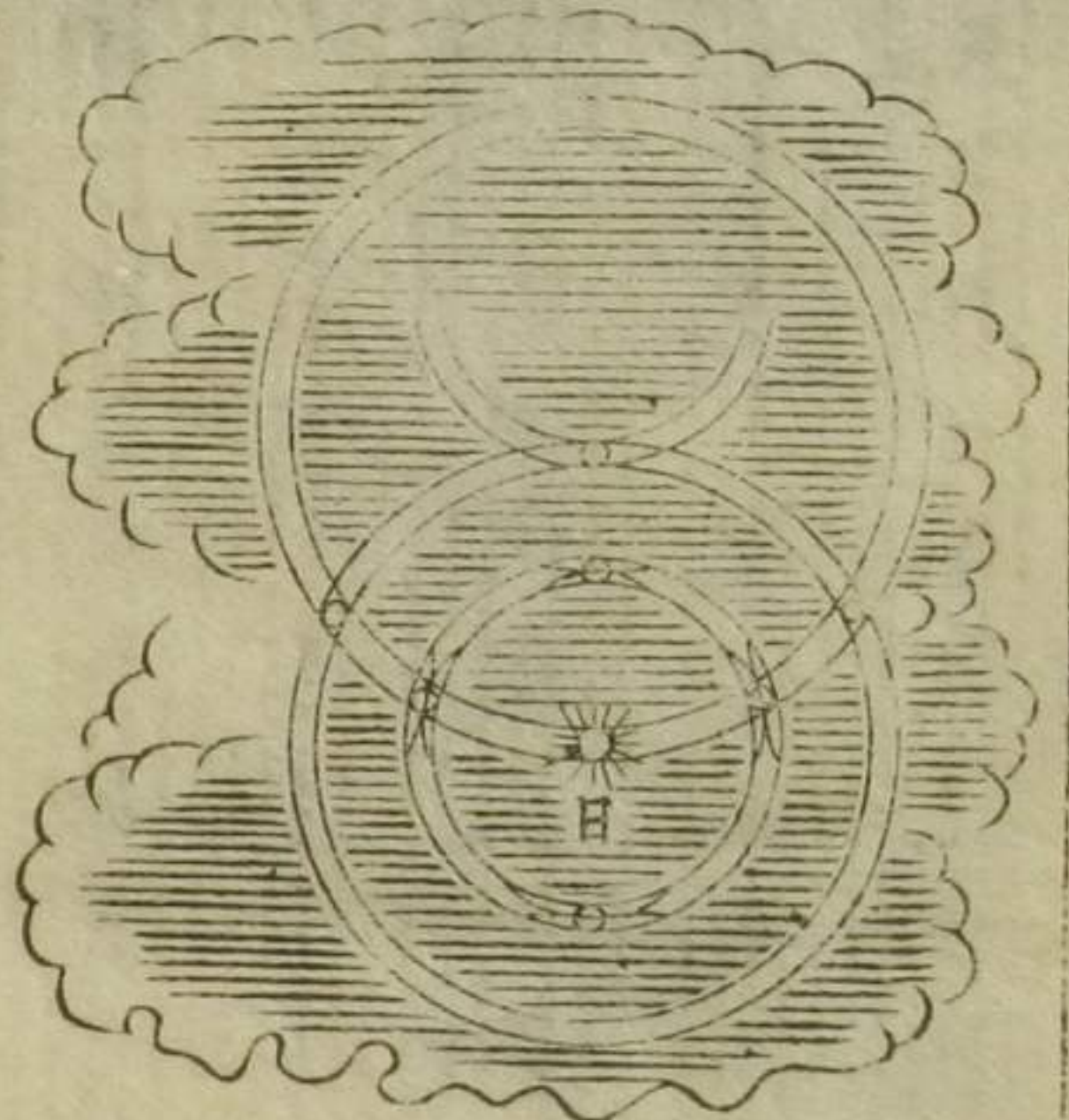


り折きて人の眼小投げ及ももの七色の彩色と
 具へ美麗小見ゆるも自然の道理あり又朝ハ
 西小見へ々ハ東小騰るの理合ハ日輪を後の鏡
 小壁へ村雨の水滴と前の鏡小比べあバ朝夕と
 も日輪と背小負ひて虹の騰るを見るの理あり
 元来虹ハ環の形あきども下の方ハ地小蔽ハき
 全体と現をさしバ誰も圓さものとハ思わざ
 るべし試小船の帆柱或ハ高き丘杯小登り虹の
 騰ると見ふバ稍ヤ下の方と見るべし又虹ハ村

雨小限らど瀑布の水烟日輪より光を受け現を
るりり又日光と背小負ひ含こし水を噴き出
さバ目前小環状の虹と生むぐさいきと云ふ
人ハ天空のがつ山の中おて高三百五十間の絶
壁より間近く隣りたる虹と見とる小全環鮮々
小輝き美麗と極め且環の中小己と始め同行の
朋友並小馬杯の象映りたる波見しとありと
云ふ

九日同時小出でたる事

大古唐土小堯と云へる帝ありしが此帝の時九
の日輪同時小天小輝きしを昇と云ふ弓の上手
之を射落したりと云ふ説りきども固より信む
べき説小何れを日輪の數はるが如く見ゆるハ
間々あることふきども昇が矢の達まぐさ小も
何れぞ且射て墜るべきふも何れぞ爰小彼千六
百三十年我寛永七年日耳曼國の天文學者を
いまると云ふ人或は日日輪の周邊ふ一ツの暈を
生じたるを見しが漸く二重三重とあり遂小四



重の暈を生ト暈の重りと
 所へ假の日輪を現えし
 真のものとは都合七つの日輪
 同時小天小耀きしを見と
 りと元來暈ハ空の水小日
 光透き通るより起るものふて猶不村雨の水溜
 日光を受けて投げ反さふ異あるなり斯く云ハ
 を空の水とハ何ものふるやと問ふ人も何と云
 きガ空ハ高き程寒さ甚しきものふるハ富士杯

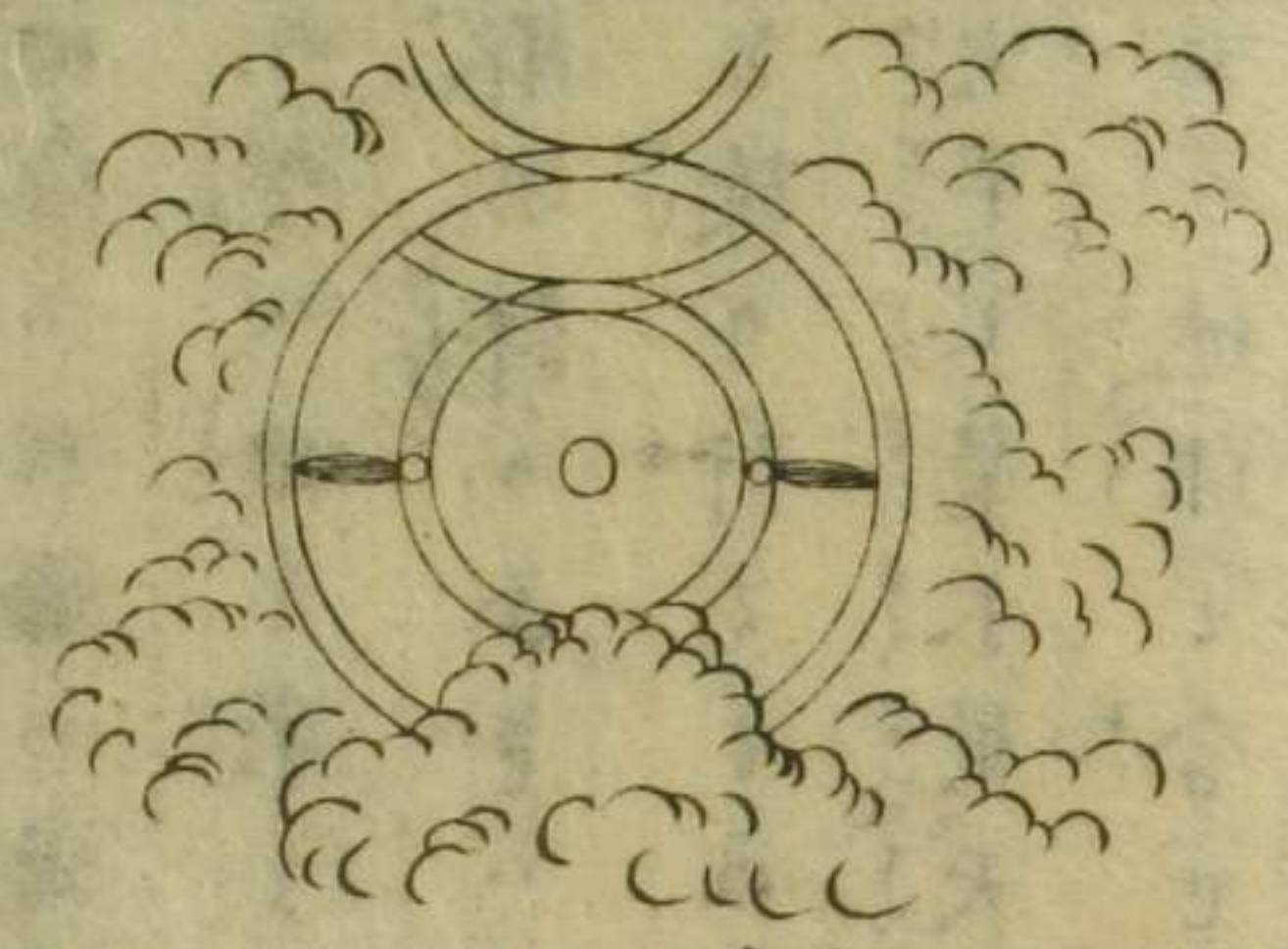
の如き高山夏ふも雪を戴
 くを見て合点行くべしそ
 の寒き所へ雨を結ぶべき
 細やゝある水滴騰り凝て水
 とあり満面鏡の如く映ふ空小日
 光透通り環の如き光を現したる
 を日暈と唱へ來る其氷の模様ふし
 一ツの暈を現ハるは或ハ二重三重の暈を現
 ハるは此日小現も是なる暈ハ四重ふし



の環互小重りたる所ハ殊更玲瓏とるを以て互
小日光を投げ反り相映りし由名恰も七ツの日
輪と掛けし如く有りたるあり猶不一ツの燈籠と
掛け其周邊六面の鏡を置き互小燈光を映し
たるが如し何も不思議あることあり

三月並び照き事

中古比耳西亞の名高き天文學士「へうりま」と云
ふもの我萬治三年彼千六百六十年三月晦日の
夜の彼邦の曆我邦の曆と月暈と日輪と違ひ十五日は造り
圓月と



見たる月の周邊小一ツの白き暈
定まりし月の周邊小一ツの白き暈
と生じ漸く引て三ツの暈を重ね
中かす暈の兩側小二ツの月と現
したるを見たりと月暈の現
ハ三月ハ日暈と同一道理なき
を三ツの月同時に出でたるも七

の日輪大空の氷小映ふたると異なることあり
我邦倍小て何時の頃より七月二十六日の夜
小三ツの月同時昇ると云ひ傳へ月待するの習

ひかり全く此夜小當り斯る幾象を見しこと何
るより遂に邦俗とありたるなりん

流星並小火の玉の事

地球の日輪の周邊を旋り全一年を經て再度元
の所へ回りに來るハ同社の著述せる訓蒙窮理圖
解小詳々ふまゝ爰小贅言せむ却説日輪の周邊
を旋り行くもの獨り地球のまかりて水星金星
火星土星木星天王星海王星として七の大なる星
なり地球と合せ都合ハツのものなハ惑星といふ

ふふり此外小七十三の
小惑星と前小云へる
六百計りの彗星なりて
同トく周りに行ものなる
ガ又此外小幾百萬と數
知まむ極めて小星何
るて旋り行き唯地の周
邊を包める高四十五里許りの空氣の中を通り
行く間此氣と觸れ合ひ光を放つものなり此即



世小流星或ハ火の玉杯と唱ふるものありてこの
星ハ元來石塊ふきハ地杯と齊しく自己ハ光
ふきものふきとせりの周りに行く速極めて神速ふ
る由名空氣と觸き當り燧石の打火刀と觸き火
と放つの理合ふて光を放つものといふ遇小地
と間近く来るもの地の物を引く力小引くを落
事ハ唐土の書冊小書記一某の國小墜る石
有りといひ歐羅巴の諸國小も奇物を集め置く
場所へ列ね置き諸人小見物させ我國小も諸方

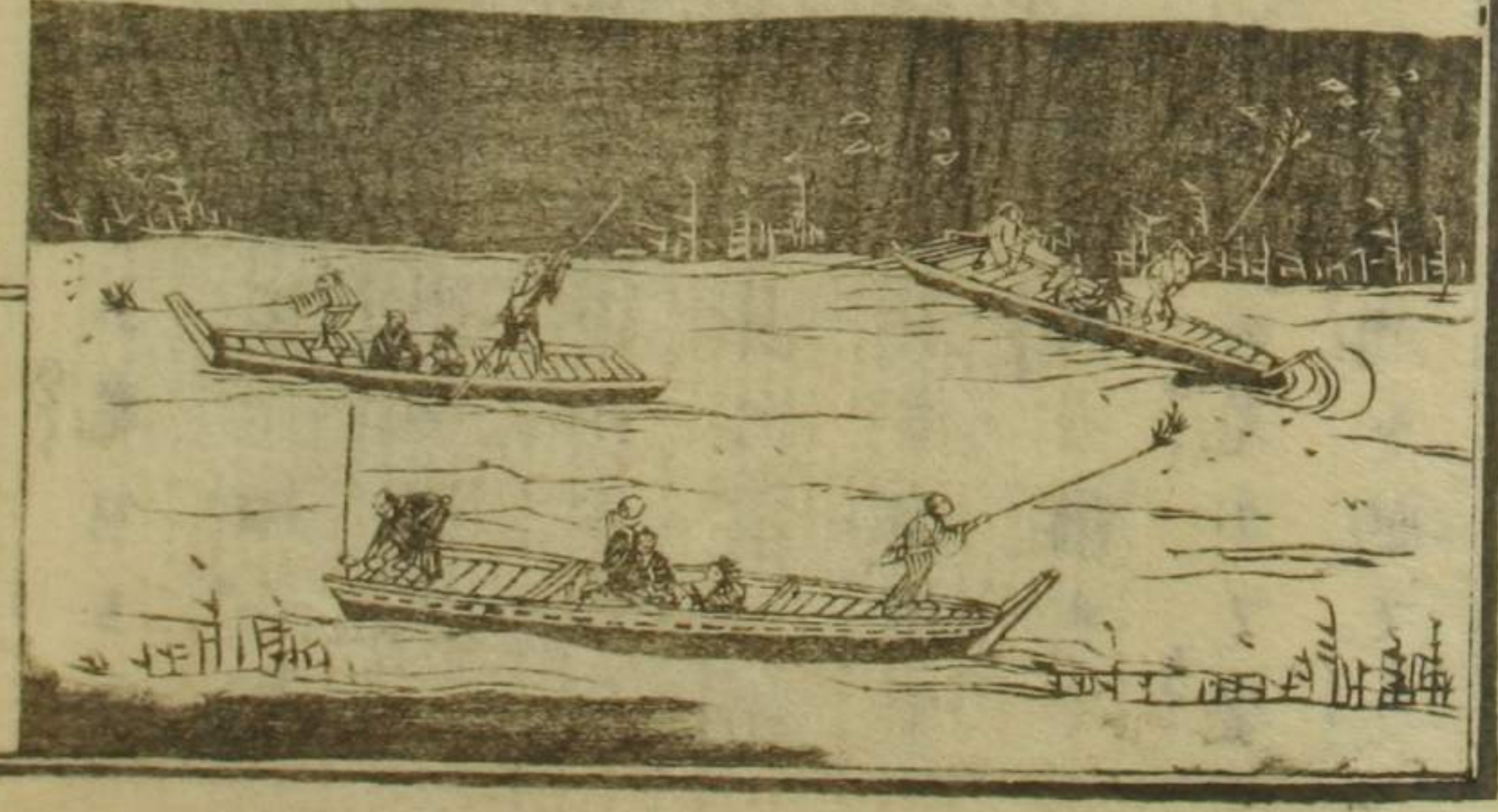
小墜一例し有り余自づか其石を見たる人の話
一と聞く小尋常の石と異あること有り様ふき
ども少しく色黒く之と碎き吟味をば全く地
上の石と質を異ふると云ふ九月十月の間小
此星と見る處と多きハ此星の周りに行く道筋丁
度此頃小至り地球の道筋と互小近く来るが由
名有り

陰火の事

光りば色ハ熱く熱けきハ光りハ一般の法ふ

見ども熱くして光あく光あつて熱うらざるも
 のり湯の如き何程熱くとも光あく螢火朽
 木生の海魚海水不知火陰火杯の類ハ光あきど
 も熱うらむ此種の火ハ皆不を不と云ふもの
 水素と調合一燐化水素とあり自然の理合を以
 て光と放つものなり同ト種類の中ふても螢火
 ハ王公貴人より婦人小兒に至るまで誰も愛弄
 せざるハあし殊小宇治川の螢狩ハ京洛間の諸
 人見物のさめ市とあを程ありと聞へト々嘗て

此と恐き一人は多聞の
 又朽木より光を放つはと
 り椀杯の朽ち腐れさるもの
 小最も多く怪しげなるもの
 一見ゆきども元と朽木あき
 バ兒童の輩暗所ハ持行き朋
 友小奇を誇るの具とさるの
 又生の海魚殊小海老杯と
 暗所ハ持行きふ白き光と



放つべー又夜中海水と攪動らバ水小光あると
 見ると一是全く水の光小あると極めて細小
 る魚あつて水の動く小従ひ鱗鬣と振ひ揺動と
 るより起るものあり肥後肥前の海小不知火の
 と周防洋小平家の怨霊火と唱ふる火あつたハ
 ちがら斯る小魚の莫大小群集一波の浮沈と
 追ひ或ハ現ハる或ハ滅へ或ハ集り或ハ離れて
 奇怪の状と為しぬると皆知る不るの光あつて燈
 火も同様のものあれ見物の諸人酒を酌て之

と楽しむも幽趣と得ると云ふべー狐火人
 魂杯と唱ふる陰火の類も亦同トく不る不るの
 火あきども沼或ハ墓所杯の間小現るも如何小
 も物凄く見ゆるゆゑ人々畏きもの様小取沙
 汰一或ハ怨霊の火杯と唱へ婦人小兒ハ斯る火
 小行逢ふとれ震ひ恐甚きハ氣絶るもの
 たりと実ハ氣の毒あることあり或る人夜深く
 沼を渡り物凄く思ひ一折柄忽ち青き火の近
 輝しと見たる小漸く我方へ寄り來きバ惡き妖

怪の所業ありやと獨り囁やき行く程小之を捕
 へんと思ひ立ち急ぎ歩を進めけきバ追ふもの
 ありて遁ろく如く急小遁け去り我止まきバ
 彼止り我行けバ彼行きて二が動靜を伺ふ様子
 あり愈怒り力を極め追駈け行き一不忽ち滅へ
 て痕を失へり暫くありて遙小葦茅を隔て鮮々
 小現ハせ一由然此度ハ息を吞み身を潜め間近
 く寄りて急小之を襲えんと決意一徐小進を寄
 せ一小火現然として少一も動く様子あり益沈

黙一火の傍小歩を寄り急小手を舉げて打ち落
 一見きバ一片の燐化水素にて何も怪げふるも
 のふ一畢竟前小遁げ隠れ一ハ
 自己の動きより空氣を動う
 一火も之がため動き一その
 かる小後の度ハ静に近寄る
 一由然空氣を動うさき火も
 之がため小者の居所を動う
 さき之と物と譬へバ池水の面小



天竺地獄
 二七

浮ぶものつらと遷ふ水も飛入り之を捕へんと
 せば其の物必む水に促うれて先の方へゆれ我
 歸きバ亦水もつぎ我方へ来るべし然るを静ふ
 水と押し分け之を擱まバ容易なるべし空氣の
 動くも此と異なることなり元來不を不るとハ
 天地の間も具なりたる六十八色の物の一つも
 生物も多し草木杯も多少此氣を合まざるハ少
 し人も此氣をばらばら生命を保ち得るものも
 死して骨肉腐る土も返るとき此氣離る水

素と云ふ亦六十八色の物の一つと合ひ前も云へ
 る燐化水素といふるなり斯る理より墓所杯ハ
 自然此氣も多し遂に怨靈の火杯と唱へ来りし
 も種なき話ハ何れも元と不を不るの光
 ふれバ螢火朽木と異ならぬ何ぞ畏るゝふとの
 何れも事人

天變地異 大尾

